

# 特別聴講学生（留学生）の生活実態調査の 分析結果に基づく提言 —留学生が作成したアンケート調査表を使用して—

杉原道子

## 要旨

2008年の7月と8月に短期留学生を対象として、留学生自らが作成した調査票を使用し、「特別聴講学生（留学生）の生活実態調査」を行った。短期留学生の日本語能力には大きな開きがあり、留学目的も多様である。将来、日本の大学院への進学を希望する者や日本での就職を希望するが増えてきている。短期留学生の生活実態調査の結果を分析し、今後の課題を考察する。

## キーワード

特別聴講留学生（短期留学生） 受け入れ態勢 カリキュラム 異文化体験  
地域社会における生活体験

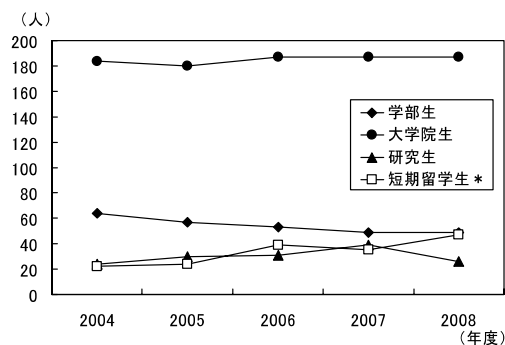
### 1. はじめに

山口大学の留学生数は平成20年5月1日現在309名で、そのうち47名が短期留学生である。山口大学における短期留学生は特別聴講学生と特別研究学生と在籍区分されている。特別聴講学生は学部の2年生と3年生が多いが、4年生もいる。特別研究学生は大学院生である。（平成20年度の特別研究学生は1名であった）。アンケートでは日本人の特別聴講学生と区別するため、特別聴講学生（留学生）の生活実態調査と記した。

外務省のウェブサイトには「短期留学」<sup>1)</sup>について次のように記されている。「『短期留学』とは、主として大学間交流協定に基づいて母国の大学に在籍しつつ、必ずしも学位取得を目的とせず、他国・地域の大学等における学習、異文化体験、語学の習得などを目的として、概ね1学年以内の1学期間又は複数学期、教育を受けて単位を取得し、また、研究指導を受けるものであり、その授業は母国語または、外国語

で行われます」。

山口大学における特別聴講学生は年々増加している。図表1に示すように平成16年度の留学生総数は294名で特別聴講学生は22名であり、留学生総数の約7%を占めていたが、平成20年度の留学生総数は309名で、特別聴講留学生は47名になり、留学生総数の15%を占めるようになった。



図表1 在籍区分別留学生数の推移

平成20年度の特別聴講学生47名は大学間交流協定を締結している山東大学（中華人民共和国）から2名，オクラホマ大学（アメリカ合衆国）5名，仁荷大学（大韓民国）12名，公州大学（大韓民国）2名，エアランゲン・ニュルンベルク大学1名，韓国外国語大学（大韓民国）3名，北京師範大学（中華人民共和国）2名，武漢理工大学（中華人民共和国）5名，貴州大学（中華人民共和国）4名，国立中興大学（台湾）5名で計41名である。また，学部間協定を締結している群山大学校工科大学（中華人民共和国）4名，ウダナヤ大学（インドネシア）1名，キングモンクット工科大学（タイ）1名で計6名である。（キングモンクット工科大学の学生は特別研究学生である）。

## 2. アンケート調査の目的

特別聴講学生は大学間協定や学部間協定に基づき，受け入れを行っている。留学生支援室が志願者の研究計画をもとに各学部へ受け入れを打診し，各学部の教授会で決定される。特別聴講学生の留学目的，日本語能力，母国で課せられた取得単位数は様々である。今後ますます増えることが予想される特別聴講学生の指導内容や生活環境，人間関係などを調査し，受け入れ態勢を整備していくことは極めて重要な課題であると考え，アンケート調査を行うこととした。

長谷川・奥村（2007：12）は「短期交換留学生数が小さいために，交換留学生の存在がキャンパスの中で埋没してしまい，学内のごく一部の人間とのかかわりしか持たないまま10ヶ月間の短期留学を終えているのではないかとの懸念があった」と記している。本学においても，特別聴講学生の一部の学生は受講できる授業時間数が大変少なく，暇をもてあましているような様子が伺えた。この調査結果をもとに，特別聴講学生の抱える問題点を明らかにし，組織的な取り組みを行い，より充実した留学生生活を提供できるような環境整備を行い，グローバル化された大学としての信頼が得られるよう努めなければならない。

「特別聴講学生（留学生）の生活実態調査」は2008年7月と8月に行い，学習活動や生活環境を調査した。本稿ではアンケート結果を分析し，特別聴講留学生の受け入れ対策のあり方について考察する。

アンケート調査の目的は下記の3点を明らかにするためである。

- （1）特別聴講学生が山口大学に留学した目的を調査する。
- （2）特別聴講が山口大学で受けている教育内容と授業コマ数を調査するとともに，新たな授業科目の可能性を探る。
- （3）特別聴講留学生の受け入れに関する今後の改善策を模索する。

## 3. アンケート調査表の作成

平成20年に筆者が担当した山口大学の共通教育「日本語11A」のクラスは日本語中級レベルであり，アンケート調査表の作成にかかわった留学生20名のうち16名が特別聴講学生であった。中級レベルの学生にとってアンケート調査表の作成はかなり難しい課題であった。特別聴講学生の立場で自らが山口大学における留学生生活をどのように捕らえているのかについて調査し，結果を分析することは今後の特別聴講学生の受け入れ対策を立てる上で，極めて重要であると思われた。

アンケート調査表を作成するにあたり，初めに3グループに分け，1コマ当たり90分の授業の半分（45分）の時間を3コマ分当てた。学期末で十分なアンケート調査表作成の授業時間を確保できなかったため，宿題としてグループ別に質問内容の検討を行わせ，3コマ目に各グループのアンケート調査表を一本化した。その結果，特別聴講学生の視点で捉えた36の質問項目からなる「特別聴講学生（留学生）の生活実態調査」を作成することができた。（[資料1](#) 参照）

筆者は1999年度に「留学生生活実態調査」を行った際にも留学生の作成したアンケートを使用している。杉原は（2000：51）は留学生が自らの視

点でアンケートを作成する意義を下記のように記している。

- (1) 学習者の自己発信力を育成し、社会的能力を高める。
- (2) アンケート作成を通して日本語力を高める。
- (3) 一人ひとりの意見を尊重し、学習者が共同作業を行う。

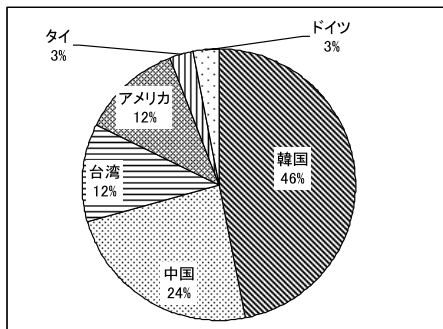
「特別聴講学生（留学生）の生活実態調査」のアンケート調査表は作成者の有志によって英語・中国語・韓国語に訳され、日本語のアンケートだけでは理解できない特別聴講学生のために日本語と各国語版を配布した。

アンケートの対象者は短期留学生の特別聴講留学生46名と特別研究学生1名計47名である。調査表を作成した特別聴講学生が出身大学別にアンケート調査表を直接配布したが、工学部の学生や直接配布できない特別聴講学生には指導教員宛に学内便で調査表を送り、御協力いただいた。34名からの回答が得られた。

#### 4. アンケートの分析結果

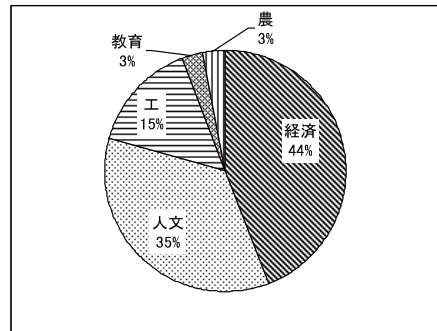
「特別聴講学生（留学生）生活実態調査」の質問は36項目あり、どの項目にも正確に回答していた。（少数第3位を四捨五入）

質問1～5はフェイスシートである。



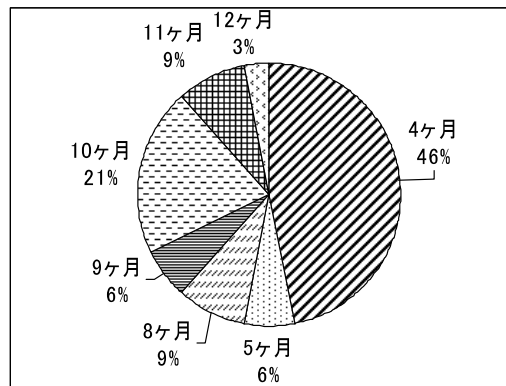
図表2 国籍

図2のように、国籍（地域）では韓国16名で一番多く、次に中国8名、アメリカ4名、台湾4名、タイ1名、ドイツ1名であった。男女比では男性は56%で女性は44%であった。



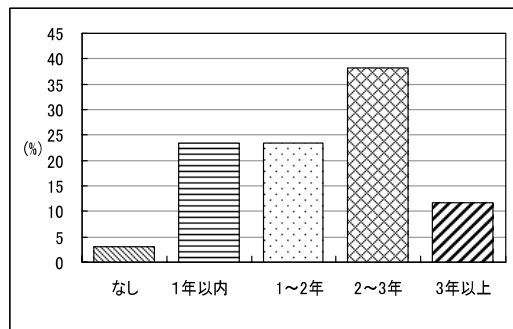
図表3 所属学部

学部別に見ると経済学部が一番多く15名、次に人文学部12名、工学部5名、教育学部と農学部がそれぞれ1名であった。



図表4 来日してからの期間（質問2）

4ヶ月目が一番多く16名で、5ヶ月目2名、8ヶ月2名、9ヶ月目2名、10ヶ月目7名、11ヶ月目4名、12ヶ月目1名であった。約半数が4月入学で、次は10月入学が多い。滞在期間が同じでも記入時期が異なる場合がある（7月と8月）

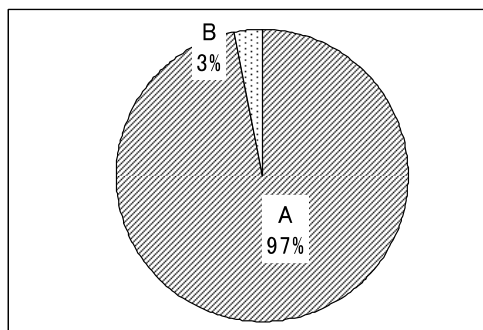


図表5 来日前の日本語学習歴の有無と期間

A. はい 1年以内 1～2年 2～3年 3年以上

B. いいえ

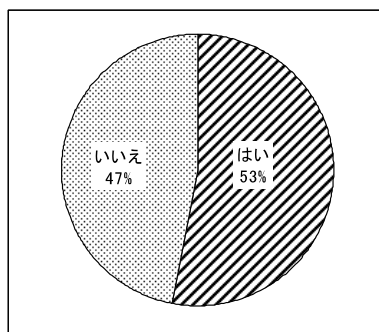
33名は日本語学習歴があったが、特別研究生1名は「いいえ」と答え日本語学習歴がなかった。2～3年の学習歴のものが一番多く13名で、1～2年と1年以内のものはそれぞれ8名で3年以上の日本語学習歴のある者は4名であった。



図表8 チューターの有無

Aはい. Bいいえ.

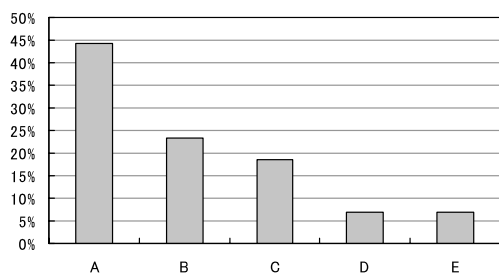
1名を除き33名にチューターがついている。



図表6 日本語能力試験の受験の有無

日本語能力試験の受験経験者は18名で、1級合格者9名、2級合格者3名、3級合格者4名で、未記入2名であった。受験していない者は16名である

1週当たり	人
1h	8
2h	11
3h	1
4h	1
不定	1
無回答	11



図表7 日本に留学するきっかけ

A. 日本語の勉強 B日本の生活に興味がある  
D. 国際交流が好き C. 専門の勉強 Eその他

日本語の勉強と答えたもの19名(44%)で日本の生活に興味があると答えたものが10名(23%)であった。

質問6から質問17までは勉強に関する質問である。

図表9 チューターとの学習時間(週当たり)

チューターから週2時間程度の支援を受けている特別聴講学生が多い。

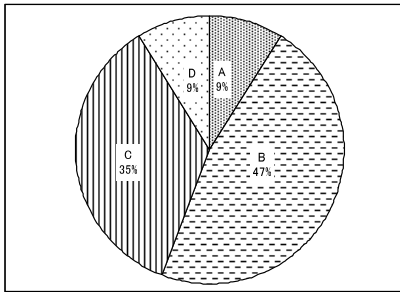
質問7は、「チューターは勉強に役に立ちますか」という質問であり、「はい」と答えた者は79%であり、その理由を次のように答えている(原文のまま)。

「日本語会話いっぱい練習できます」(中国)。「わからないことがあったら、すぐメールで連絡し、説明してもらいます」(中国)。「間違うところがよく直してくれました」(台湾)。「専攻用語および勉強の役に立ちます」(韓国)。「ききたいことがあるとき、一番うかがいやすいから」(韓国)。

「宿題などをチェックしてくれます」(韓国)。

「いいえ」と答えたものは21%でその理由は「あまり会っていませんので…」(韓国)。「ひとり で べんきょうのほうがいいとおもう」(アメ

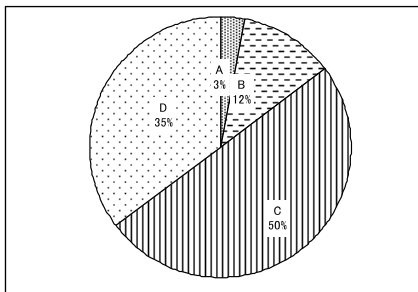
リカ)。「He is a freshman and I have many other sources」(米国)。「チューターはすごいそがしいですから」(アメリカ)等であった。



図表10 来日時の日本語能力

A. 全然わからない B. 少しわかる C. 日常会話ができる。 D. 会話上の問題はない

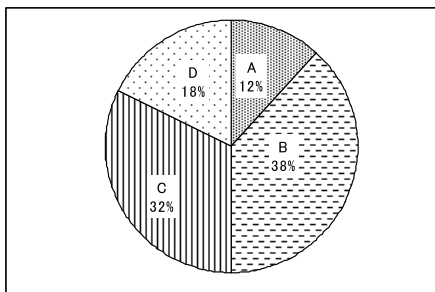
全然わからない者3名で、少しわかる者16名、日常会話ができる者13名、会話上問題がない者は3名であった。



図表11 日本語の授業の理解度

A. 0-20% B. 20-50% C. 50-80% D. 80-100%

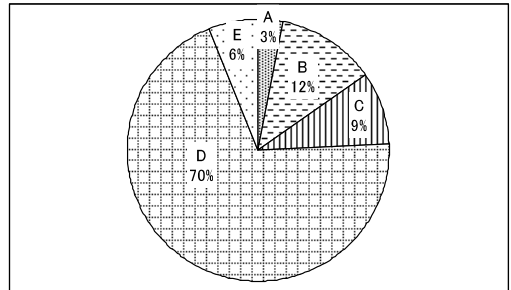
Aは1名、Bは4名、Cは17名、Dは12名である。日本語の授業はレベル別にクラス編成されており、85%以上の者が理解できているようである。



図表12 専門の授業の理解度

A. 0-20% B. 20-50% C. 50-80% D. 80-100%

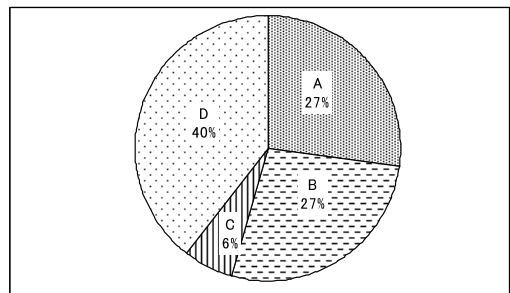
Aは4名、Bは13名、Cは11名、Dは6名であった。専門の授業は約半数の者しか理解できないようである。



図表13 日本語の授業への評価

A. 役に立たない B. 少し役に立つ C. ふつう D. 役に立つ E. 非常に役に立つ

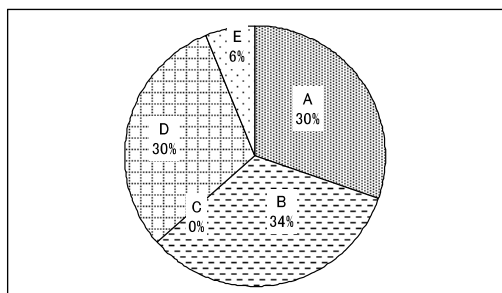
役に立つと答えたもの22名であるが、非常に役に立つは2名に過ぎない。少し役に立つは5名、役に立たないも1名いる。日本語授業の評価が高いとは言えないため、聞き取り調査などを行い詳しく原因を調査する必要がある。



図表14 日本語の勉強で一番むずかしい点

A. 文法 B. 漢字 C. 聴解 D. 会話 E. その他

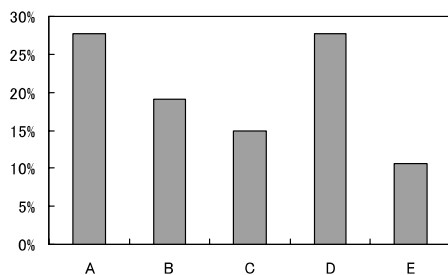
文法と漢字が9名、聴解が2名、会話14名であった。回答者は来日して4ヶ月以上たっている者が多いので、聴解にはかなり慣れてきたようである。しかし、場面に即した会話は4割以上の学生が難しいと答えている。



図表15 日本語文法が一番むずかしい点

- A. 尊敬語 B. 使役・受身 C. 時制 D. 助詞  
E. その他

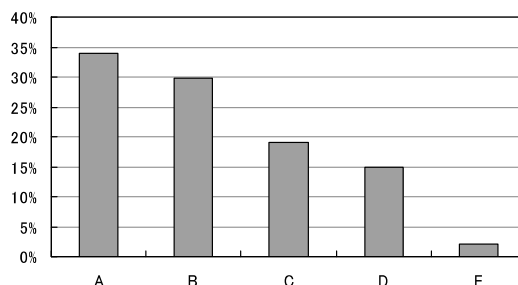
使役受身が一番むずかしいと答えたものが11名で一番多い。特に主語が省略されている場合はかなり混乱するようである。次に尊敬語と助詞が10名であった。その他は2名である。時制が難しいと答えた者はいなかった。1名はAとB両方を選んでいたので削除した。



図表16 日本に来てから進歩した日本語能力

- A. 会話 B. 読解 C. 聴解 D. 漢字 E. その他

聴解17名、会話16名であり、日常的に日本語に触れているので聴解と会話の伸びが実感できたようである。読解は1名、漢字は2名であった。



図表17 勉強したい内容

- A. 日本語 B. 日本文化 C. 日本の歴史 D. 日本事情 E. その他

質問15は日本について勉強したい項目(複数回答可)を問うもので、日本語15名、日本文化14名、日本の歴史9名、日本事情が8名であり、日本語という言語への関心のみならず、日本文化や日本事情に対する関心が高いことが判明した。

質問16は受講しているコマ数を尋ねるもので、ある(1コマは90分)

A. 専門	3.9
B. 日本語	3.4
C. 日本語以	1.9
D. その他	2.7

平均コマ数	7.4
最小	5.0
最大	13.0

図表18 受講コマ数

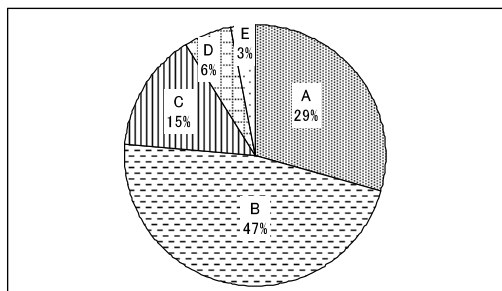
(コマ数は少数第2位を四捨五入)

- A. 専門 B. 日本語 C. 日本語以外の共通教育  
D. その他

受講コマ数が一番少ないものは5コマで、一番多い者は13コマ受講している。平均7.4コマとなっている。分野別に見ると日本語は34名全員が受講しており、平均コマ数は3.38コマである。専門科目は27名が受講しており、平均コマ数は3.9コマであった。日本語以外の共通教育科目

の受講者は12名で平均コマ数は1.9コマであった。日本語以外の共通教育は22名が何も受講していない結果となった。その他2名については、どのような授業に参加していたか分からない。今後はその他についての記述欄を設ける必要がある。

質問17は授業以外の学習時間についてである。

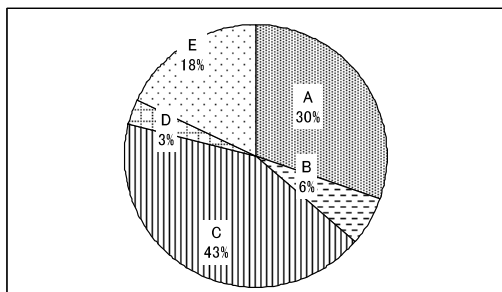


図表19 授業以外の平均学習時間

- A. 1時間以内 B. 1～2時間 C. 2～3時間  
D. 3～4時間 E. 4時間以上

1時間以内10名、1～2時間が16名、2～3時間が5名、3～4時間が22名、4時間以上1名となっている。2時間以内が76%であり、自主学習時間が大変少ないと言える。

質問18から21までは生活についての質問である。



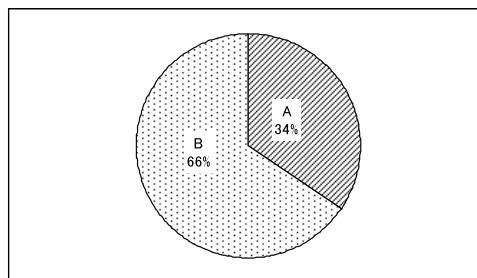
図表20 日本の生活で一番困ったこと

- A. 学習 B. 食生活 C. 人間関係  
D. カルチャーショック E. その他

人間関係が43%、学習30%、その他18%、食生活6%、カルチャーショック3%の順になっている。アジアからの留学生が多いためか食生活には多くの者が順応していた。また、カルチャーショックを受けた者も1名だけである。テレビ

等の普及で、来日前から日本についての基礎知識は得ているようである。この質問に関しても、聞き取り調査が必要である。

質問19はクラブやサークルについてである。



図表21 サークルやクラブについて

- A. はい クラブ・サークル名 理由  
B. いいえ 不参加の理由

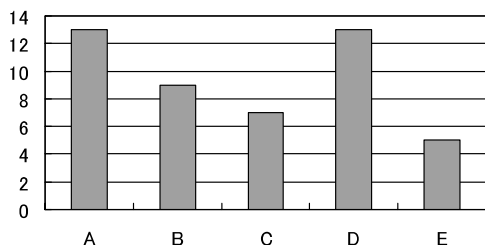
参加していない者は66%で参加している者34%を上回っている。参加しているクラブは茶道・剣道・写真・SAS（アカペラサークル）にそれぞれ2名が参加しており、アメリカンフットボールやバンドクラブに所属している者もいる。また、参加していない理由は、「クラブに入ったことがあったんですが、留学生として日本のクラブ・スケジュールが厳しすぎると思ったからです」。「ひまがない」。「時間が合わない」。「日本語のもんだい」等であったが、時間がないという答えが一番多かった。

質問20はアルバイトについてである。アルバイトをしている者としていない者は50%ずつで同数である。アルバイトをしている理由を次のように記している。「バイト先で日本の社会や文化をストレートに体験できるし、現場の日常会話や授業の中で勉強できない単語やほかの知識もたくさん習えるので」、「お金が不足し、いろいろな経験をしたいですから」などであった。また、アルバイトをしていない理由は、「時間がありません」、「バイトより自分で日本語を勉強したほうがもっといいと思いますから」、「まだ日本語のlevelが低いと思う」、「十分お金がある」などであった。

質問21はアルバイトがしたいか否かを問うもので、実際にアルバイトをしてみたいと望む者は29名で約85%を占めている。アルバイトを望まないものは5名であった。

また、アルバイトをしたい理由は日本語学習のためが一番多く21名、金のためが17名、社会経験のためが15名、友達を作るためが14名であった。

質問22から27は人間関係に関するものである。



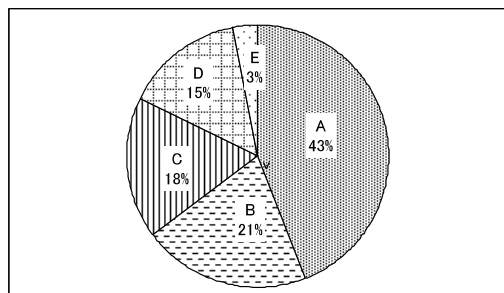
図表22 友達作り

- A. 授業 B. クラブ・サークル C. アルバイト  
D. 親友の紹介 E. その他

友達作りには授業での出会いと親友の紹介が13名で一番多く、クラブ・サークルが9名、アルバイト7名、その他5名をなっている。

質問23は友達の人数問うものである。3〜4人が31%と一番多い。次に8人以上が30%を占めているが、友達の定義が個人によって異なると思われるので、人数の比較はあまり意味がないと思われる。

質問24は友達の国籍についてである。

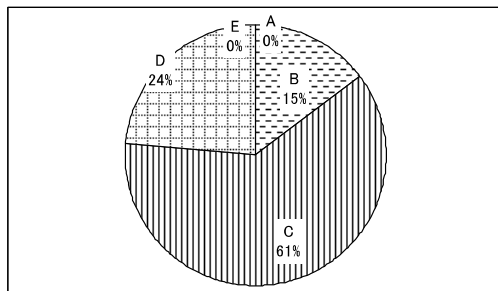


図表23 友達の国籍

- A. 母国 B. 日本 C. 中国 D. 韓国 E. その他

母国の友達が43%と圧倒的に多い。次に日本人、中国人、韓国人となっている。当然のことであろうが、自国の友達以外は母数の多い順になっている。

質問25は国際交流の行事へ参加についてである。

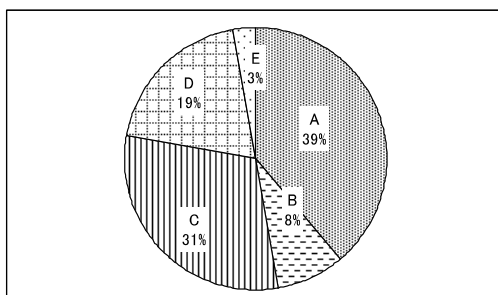


図表24 国際交流行事への参加

- A. 全然参加しない B. あまり参加しない C. 時々参加する D. よく参加する

時々参加するが一番多く61%、よく参加する24%、あまり参加しない15%である。全然参加しない者はいなかった。

質問26は多文化交流についてである。



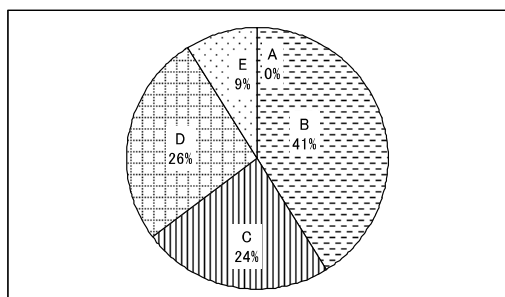
図表25 多文化交流で一番困ること

- A. 言語の差 B. 生活習慣の差 C. 文化の差  
D. 困ることはない E. その他

一番困ることを順に記すと、言語の差で14名、文化の差10名、習慣の差2名、その他1名であったが、困ることがないと答えた者が7名もいる。

質問27は人間関係の満足度についてである。



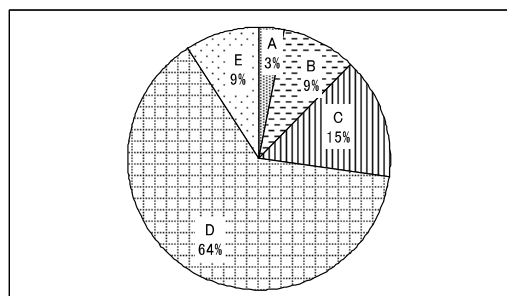


図表26 人間関係に関する満足度

- A. 不満 B. あまり満足していない C. ふつう  
D. 満足 E. とても満足

不満と答えたものはいない。あまり満足していない14名、ふつう8名、満足9名、とても満足3名であった。人間関係に関する満足度はかなり低いといえる。今後の対策が必要である。

質問28から30は旅行に関する質問であるが、本稿では省略する。

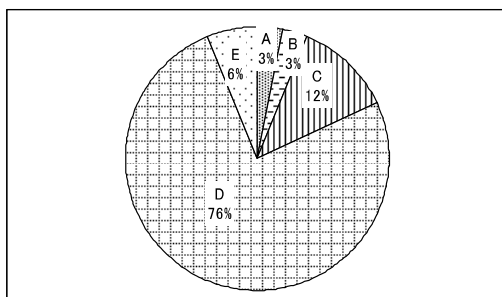


図表27 国際交流会館についての満足度

- A. 不満 B. あまり満足ではない C. どちらとも言えない D. 満足 E. とても満足

不満は1名、あまり満足ではない・とても満足は共に3名、どちらともいえない5名、満足21名である。満足度は高いと言えるであろう。

質問26は先生の指導や授業内容についてである。

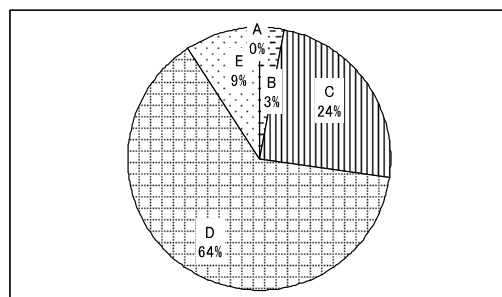


図表28 先生の指導や授業内容

- A. 不満 B. あまり満足ではない C. どちらとも言えない D. 満足 E. とても満足

不満・あまり満足ではないがそれぞれ1名、どちらともいえない4名、満足26名、とても満足2名であった。満足している者が多いと言えよう。

質問33は事務手続きについてである。



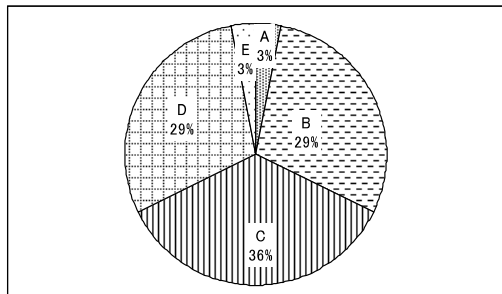
図表29 事務手続きについて

- A. 不満 B. あまり満足ではない C. どちらとも言えない D. 満足 E. とても満足

不満と答えたものはいない。あまり満足ではない1名、どちらともいえない8名、満足21名、とても満足4名であった。

質問34は留学生への待遇となっているが、満足55%、どちらともいえない21%、とても満足18%、不満とあまり満足ではないが各1名であった。質問の内容があいまいであるため、どのような場面における待遇についてかが分りにくい。

質問35は日本の物価についてである。



図表30 物価水準

A. 不満足 B. あまり満足ではない C. どちらとも言えない D. 満足 E. とても満足

どちらとも言えない12名、不満足とあまり満足ではないは同数で10名、とても満足と不満足が1名であった。

質問36は留學生活に関する自由記述となっている。

特別聴講留學生の感想は「楽しかった」「いい経験だった」というような感想が90%以上であり、満足度が非常に高いと言える。次に特別聴講留學生の帰国前の感想を原文のまま記す。

\* 山口で過してきた一年間の留學生活は私にとって本当に一生忘れたい貴重な体験でした。きれいな青空とおいしい空気、母親のような恩師と秘密のない心友、素晴らしい見學活動と楽しいキャンパスイベント、無邪気な笑顔と感動の涙……忘れたい人ものは数えきれないほど多かったです。留學体験から習った最も大切なものは愛と勇気を持って生きていくこと、また素朴で自然な姿で人と交流することです。こんな充実な留學生活により、私は自分の成長を確実に感じました。帰国する日が近づいてきたこの時、一言だけを言わせていただきたいと思います—ありがとう、山大! ありがとう、山口! (中国)。

\* 視野が広がり、日本語の勉強にも役に立つし、いい経験だと思います(中国)。

\* 全体的な生活には満足していますが、友達があまりできなかったことは残念だと思います(韓国)。

\* I enjoyed my life in Japan and learned many about Japan and it's culture! (ドイツ)。

## 5. アンケート分析結果に基づく考察

2008年度の前期末にアンケート調査表の作成に取り掛かったため、調査項目を十分に検討する時間が足りなかったが、特別聴講生の目線でのアンケート調査表を作成することができた。質問内容が明確でないものがある。留學生に対する待遇や国際交流の行事などについても地域でのことか大学内でのことか、分らないので、具体的な質問にしていく必要である。また、質問内容の重複も見られた。今後調査票の作成時間を充分に取り、より良い調査表の作成を行いたい。

また、8月に配布したアンケート調査表は一部の留學生がすでに帰国していたため回収できなかった。今後は7月中旬までに配布し、7月終わりまでに回収できるように計画する必要がある。

アンケートの分析結果によると、特別聴講留學生の留學生活の満足度はかなり高く、1年足らずの日本での生活を楽しんでいる様子が伺えた。しかし分析結果を見るといくつかの問題点もある。

### 問題点1「受講科目数」と「学習時間数」

質問16と17の分析結果を見ると、日本語能力が高く、日本語学習歴の長い者は専門科目も含め受講コマ数が多い(13コマ受講している者もいる)。しかし、日本語能力が低く、専門科目を受講できない留學生も多い。

コンピューターによる日本語能力判定テストでクラス分けを行ってきたが、コンピューターだけでは総合的な日本語能力を判定することはできない。担当教員による面接を行い、コミュニケーション能力や既習歴なども調査し、可能な限り多くの日本語の授業が受講できるように配慮する必要がある。

授業以外の学習時間数は全体的に見て大変少

ない。1時間以内10名、1～2時間が16名、2時間以内が76%であり、意欲的に学習しているとは言えない。

受講科目数が5コマ以下の留学生は、アルバイトに多くの時間を費やし、ゲームなどの遊びに夢中になっている傾向も見受けられる。日本語能力が充分でない学生にも受講科目数を増やしていく必要がある。日本語や専門科目以外の授業も受講できるようなカリキュラムの編成が必要である。

### 問題点2. 「人間関係」

質問27の分析結果を見ると人間関係に「あまり満足していない」と答えた特別聴講学生は44%もいる。親友が一人もできなかったと嘆く者もいた。1年程度の滞在では、各自で友人を見つけることはなかなか難しい。一部の一般学生を除き、留学生と積極的に交流しようとしないう一般学生も多い。チューターだけではなく、多くの一般学生と交流できるような機会を増やしていく必要がある。

### 問題点3. チューターへの指導の徹底

日本語能力が低い特別聴講学生にとって、チューターの学習支援は極めて重要である。チューターへの仕事の内容の説明が行われていない場合もある。チューターへの指導は指導教員の仕事とされている。留学生とチューターの人間関係がうまく行っていない場合やチューターが責任を果たしていない場合はチューターを交代させることも考慮すべきである。

## 6. 今後の特別聴講学生受け入れに関する提言

今回行ったアンケート調査をもとに今後の特別聴講学生の受け入れ対策に関する提言を行いたい。

### 提言1 特別聴講学生の受講科目を増設する。

質問15の分析結果によると、特別聴講学生の来日目的は日本語の学習だけではない。日本文化や日本事情にも深い関心を持っている。日本

文化や異文化理解のためのクラスや芸術系や体育系の授業科目にも参加できるようにしていく必要がある。留学生が一般学生と共に学べるような授業科目の導入が極めて重要な課題である。

奥村・長谷川（2007b：40）は山梨大学において短期留学生に人気がある受講科目として、体育系の「テニス」「アウトドア・スポーツ」、芸術系の「書写演習」「陶芸」などを挙げている。

新倉（2006：5）は日本人学生と留学生がともに各自の文化や言語を他文化や多言語とのかかわりあいの中で相対化し、客観的に見つめ直すという、相互通行的な啓発を実践する国際教育の一環としての「混在学習」について記している。

杉原(1999)は「留学生は大学における重要な構成メンバーであるにもかかわらず、留学生が自己発信する機会はほとんどないと言える。留学生が何を考え、何を望んでいるかについてもっと耳を傾けていかなければならない」と記している。留学生と一般学生が共に学べる環境づくりは、双方の学生の国際対応力の養成に不可欠である。現在日本語以外の共通教育を受講している者はわずかに12名である。

### 提言2 大学がネットワークを構築し、組織としての対応力を強化する。

特別聴講学生は各学部が受け入れを行っているので、各学部で教育内容を決定し、留学生センターが係わる必要がないという意見もあるが、大きな誤りである。日本語の授業を担当している留学生センター教員の協力は不可欠であるし、現状では各学部の指導教員に過重な負担がかかっている。各学部の担当者は大学間協定校の担当者と綿密な調整を行い、その内容について留学生センターの教員・留学生支援室・各学部の留学生担当係と共有する必要がある。定期的な情報交換を行い、組織的な対応力を強化することが肝要である。

### 提言3 指導教員を増員する。

現在47名の特別聴講学生に対し、指導教員はわずか23名である。一人で19名の留学生を引き

受けている教員もいる。毎年増加傾向にある特別聴講学生の受け入れ体制の拡充は急務である。

筆者は2004年に〔資料3〕『留学生指導教職員の手引き』を作成したが、残念なことに殆どの留学生受け入れ教員に配布されていない。

大学の国際化を図るためには、各学部各学科において、指導教員と一般学生が留学生と日常的に触れ合えるような環境づくりが大切である。

#### 提言4 留学生と一般学生との交流の場を設定する。

日常的に一般学生と留学生が交流できる決まった場所の確保が大切である。週に何回か1日1時間程度の交流時間を決め、ボランティアとして参加できる教員を各学部から募集し、一般学生と留学生の交流を援助すると良い。毎月のタイムテーブルがあると、留学生も多くの教員との意見交換ができる。

平成15年度の留学生交流ボランティアの一人として留学生との交流活動に参加した北村(2003:50)は次のように述べている。「しばしば、大学は『大きく学ぶ』場所である、と言われる。この「大きく」には、深さはもちろんのこと広さも含まれていると解することができる。今まで生活してきた『日本』という範囲で満足するのはもったいない。興味の対象を思い切って『世界』へ広げてみるのも一興であろう(中略)今年度、留学生交流ボランティアは数多くの参加者を抱える学内有数の活動へと成長した。それにも係わらず活動初期の和やかな雰囲気を保ち続けている。このことは今後とも大切にしていきたいものである。そのような活動からこそ、留学生との親密な交流、ひいては海外への眼差しを向けることができよう。留学生交流ボランティアは、まさに世界について『大きく学ぶ』ことができる稀有かつ絶好の機会である」。

杉原(2004:57)は留学生と一般学生が活動を共にすることによって、一般学生が留学生から大きな刺激を受け、自ら海外留学への関心を深めていく過程を記している。

#### 提言5 チューターへの指導を強化する。

留学生にとってチューターの存在は極めて大きい。1999年度に行った「留学生活実態調査」<sup>2)</sup>においても、杉原(2000:57)は「チューター制度を充実させるための方策を講ずる」必要性を記している。

2004年度に『チューターマニュアル Q&A』(12の質問)〔資料2〕を作成した。その後ワーキンググループが結成され、一部改定された。チューターは収入を得ているので、仕事として自覚させる必要がある。留学生の人間関係を広げられるような人物をチューターとして選出することが重要である。「チューターを頼まれたが、何をすればいいのかわからない」と述べる者もいる。チューターと留学生の双方を集め、チューターの仕事の役割や約束事を確認する必要がある。各学部の留学生担当係りの主導のもとで4月と10月の入学時には必ず「チューターマニュアル Q&A」を配布し、説明会の開催を行事の中に組み込んでいく必要がある。

#### 提言6 地域社会における生活体験の場を提供する。

特別聴講学生は日本の文化や生活習慣に強い興味を持っている。将来日本での就職を考えている者もいる。地域社会の中で一般学生と共に学べるような実践体験プログラムを考え、単位化していくことも必要である。小・中・高等学校の国際理解教育の講師として特別聴講留学生も招かれるが、現状のような単発的な活動ではなく、継続的に双方にとって教育的価値の高いプログラムを考えていかなければならない。

#### 7. おわりに

世界各国の大学で在学中に海外の大学への留学を卒業条件にする大学が増えてきている。日本の大学でも在籍期間中、学生全員に海外留学経験をさせようという企画を立て始めた大学もある。学生に国際対応力をつけさせる必要性が強く認識されてきた結果であろう。今後この傾向は増え続けていくものと思われる。

韓国の仁荷大学の留学生が「多くの男子学生は兵役期間も含めてではあるが、海外留学のため7～8年ほどの大学生活を送る学生が増えてきている。一人ひとりが自由に決断し、英語力を強化するために英語圏へ留学する者、日本の文化やアニメに興味を持ち、日本へ留学する者など様々である」と述べていた。

受講科目数が大変少ない特別聴講学生でも、山口大学での留学生活について「生涯忘れることのできない貴重な経験であった」と述べている。留学生は母国と日本を常に比較しながら、日本人が気づかない多くの日本の優れた点を見出しているようである。このアンケートに回答してくれたエアランゲン・ニュルンベルク大学・オクラホマ大学・貴州大学の3名の学生は母国の大学を卒業後、日本の大学院へ進学したいと決意し、帰国前に相談に来た。

今までも山口大学に短期留学生として来日した留学生が日本の大学院へ進学、その後日本企業に就職した例も多くなってきた。山口大学元留学生の多くは東京に在住し、連絡を取り合い助け合っているが、残念ながら大学とのネットワークはない。

また、2003年に特別聴講学生が留学生交流ボランティア主催の「世界の大学を知ろう」という活動で、母国オクラホマ大学を紹介した際には十分に日本語で説明できないため、かなり英語で説明していたが、再度来日し、国際交流委員として地方都市で仕事をしている間に、すっかり流暢な日本語を身に付け、山口大学を訪問して来た時には日本の医療保険制度を絶賛していた。

杉原（2004：60）は「国際化が急速に進展しつつある今日の大学教育において、異文化間の相互理解・相互認識を高める実践を中心とした教育に力を入れ、一般学生の国際対応力を実質的に養成する必要性があることは自明のことである。しかしながら、現実には何らその理論も方策も具体化されていない」と記している。

短期留学生の目的は語学の習得に限らない。また、一般学生の海外留学へのプログラムも語

学研修のみならず、各大学で特色ある多様なプログラムが企画されている。

新倉（2006:2）は「平成十五年中央教育審議会答申において新たな留学生政策の基本的方向が示されて以来高等教育機関においては、日本人学生をいかに海外に派遣するか、海外留学の促進に向けての対応策論議に拍車がかかり、留学生受け入れとともに、海外留学の在り方についてもさまざまな施策の提案がなされてきている」と記している。

特別聴講学生の教育内容の検討は急務である。大学間交流協定校との信頼関係を構築していく上で、双方の大学担当者の責任は極めては大きい。

小粥（2004:27）は「異文化体験実習」の授業について次のように述べている。「『異文化体験』という、知識では測れないものを目的としたこの授業の真の価値は—希望的観測ではあるが—一人生の長いスパンの中で現れてくるはずだ。体験という『種子』を蒔くことにこそ、その意義があるといえよう」と述べている。

1年間という短い期間ではあるが、短期留学生の受け入れと一般学生の派遣に関して、語学力を身に付ける目的だけに特化することなく、グローバル化された世界で一人ひとりに国際対応力をつけ、世界各地で活躍できる素地を身につけさせることに視点を置いた教育が必要である。一人ひとりにしっかり『種子』を蒔くことができるプログラムを早急に理論化し、具体化していくことが肝要である。

（留学生センター 講師）

#### 【引用文献】

- 1) 長谷川千秋・奥村圭子, 2007a, 「短期交換留学生の大学生活についての意識調査—短期留学生は大学に何を求めているのか—」 『山梨大学留学生センター研究紀要』第3号, 12-31
- 2) 杉原道子, 2000, 「『留学生生活実態調査』125名のアンケート分析結果に基づく提言—留学

- 生が作成したアンケートを使用して」『JALT 日本語教育論集』第5号, 50-61
- 3) 杉原道子, 1999, 「プロジェクトワーク: 留学生による『留学生実態調査』のアンケート作成について」『続 私の工夫・私の失敗』平成11年度日本語教育学会 第5回研究集会【実践研究発表会】予稿集, 32-35
  - 4) 杉原道子, 2004, 「大学に留学生を受け入れることの意味—大学, 一般学生, 留学生, 地域にとっての意味を考える—」『国立大学留学生指導研究協議会 留学生交流・指導研究』第7巻, 51-64
  - 5) 奥村圭子・長谷川千秋, 2007, 「短期交換留学生受け入れのための態勢と学習環境の充実へ向けて—インタビュー調査をもとに—」『山梨大学留学生センター研究紀要』第3号, 32-49
  - 6) 新倉涼子, 2006, 「海外留学の促進に向けた取組とその重要性—海外留学と留学生教育, 国際教育との有機的な連携から—」『留学交流』第18巻 第7号 2-5
  - 7) 川口真人・徳王丸美紀・岡田恵多・北本英司・中藤裕子・川村誠輝・佐藤奈津美, 2004 「平成15年度留学生交流ボランティア報告書」『山口大学留学生センター』
  - 8) 小粥良 (2004), 「スタディー・ツアーを通しての異文化学習—平成15年度国際理解教育コース『異文化体験実習Ⅱ』—」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第18号, 15-30
- してこそ—外国人留学生をリソースとした交流を考える—」『留学交流』第14巻 第12号 6-9
- 4) 松元宏行, 2005, 「留学生と地域社会との交流—群馬大学の場合—」『留学交流』第17巻 第6号6-9
  - 5) 岡益巳・玉岡賀津雄, 2001, 「留学生センターからみた留学生専門教育教官との連携について」『留学生交流・指導研究』Vol. 4, 47-67
  - 6) 横田雅弘・白土悟 2004, 『留学生アドバイザー—学習・生活心理をいかに支援するか—』ナカニシ出版

【注】

- (1) 外務省のウェブサイト 短期留学について <http://www.studyjapan.go.jp>
- (2) 「『留学生生活実態調査』125名のアンケート分析結果に基づく提言」では5つの提言を行っている。
  1. 奨学金制度を充実させる。
  2. 日本人学生と留学生が混住できるような学生寮を増やしていく。
  3. チューター制度を充実させるための方策を講じる。
  4. 留学生の知りたい情報（大学院, 就職情報などについて）大学間で情報交換する。
  5. 留学生へ地域ぐるみの生活支援体制づくりを強化する。

【参考文献】

- 1) 横田雅弘, 2008, 「三〇万人計画が実現する条件—中教審留学生特別委員会での議論を通して—」『留学交流』第20巻8号 6-9
- 2) 栖原暁, 2008, 「『留学生三〇万人計画』と地域社会」『留学交流』第20巻 第8号 18-21
- 3) 古城紀雄, 2002, 「みずからの国際化を標榜

【謝辞】

「特別聴講学生（留学生）の生活実態調査」の調査表の作成・配布・回収に関しましては2008年度共通教育の「日本語11A」の受講者に御協力いただきました。また、数名の留学生が協力して翻訳をしてくださいました。心からお礼申し上げます。

資料 1

特別聴講学生（留学生）の生活実態調査

質問 1 あなたの国 \_\_\_\_\_ 性別 \_\_\_\_\_ 男 \_\_\_\_\_ 女 \_\_\_\_\_  
学部 \_\_\_\_\_

質問 2 日本に来て何ヶ月目ですか。 \_\_\_\_\_ヶ月目

質問 3 日本に来る前どのくらい日本語を勉強しましたか。

- A. はい 1年以内 1~2年 2~3年 3年以上  
B. いいえ

質問 4 あなたは日本語能力試験（にほんご のうりよくしけん）を受けたことがありますか。

- A. はい ( \_\_\_\_\_ 級合格)  
B. いいえ

質問 5 日本に留学するきっかけは何ですか？

- A. 日本語の勉強 B. 日本の生活に興味（きょうみ）がある D. 国際交流が好き  
C. 専門の勉強 E. その他

勉強について

質問 6 チューターがいますか。

- A. はい (週に \_\_\_\_\_ 時間)  
B. いいえ

質問 7 チューターが勉強に役に立ちますか。

- A. はい その理由 \_\_\_\_\_  
B. いいえ その理由 \_\_\_\_\_

質問 8 日本に来た時 日本語がどのくらいわかりましたか。

- A. 全然分らない B. 少しわかる C. 日常会話ができる D. 会話上の問題は無い

質問 9 山口大学の日本語の授業がどのくらい理解できますか。

- A. 0~20% B. 20~50% C. 50~80% D. 80~100%

質問 10 山口大学の専門（せんもん）の授業はどのくらい理解できますか。

- A. 0~20% B. 20~50% C. 50~80% D. 80~100%

質問 11 山口大学の日本語の授業は役に立ちますか。

- A. 役に立たない B. 少し役に立つ C. かつう D. 役に立つ E. 非常に役に立つ

質問 12 日本語の勉強の中で一番むずかしいことは何ですか？

- A. 文法 B. 漢字 C. 聴解（ちようかい） D. 会話 E. その他

質問 13 日本語文法について一番むずかしいのは何ですか。

- A. 尊敬語（そんげいご） B. 使役・受身（しえき・うけみ） C. 時制（じせい）  
D. 助詞（じょし） E. その他

質問 14 日本に来てからどのような日本語能力が進歩しましたか。

- A. 会話 B. 聴解（どつかい） C. 聴解（ちようかい） D. 漢字（かんじ）  
E. その他

質問 15 日本について何が勉強したいですか。

- A. 日本語 B. 日本文化 C. 日本歴史（れきし） D. 日本事情 E. その他

質問 16 あなたは週何コマの授業を取っていますか？

- A. 専門（ \_\_\_\_\_ コマ） B. 日本語（ \_\_\_\_\_ コマ） C. 日本語以外の共通教育（ \_\_\_\_\_ コマ）  
D. その他（ \_\_\_\_\_ コマ）

質問 17 授業以外で毎日平均（へいさん）何時間勉強しますか。

- A. 1時間以内 B. 1~2時間 C. 2~3時間 D. 3~4時間 E. 4時間以上

生活

質問 18 日本の生活で一番困（こま）ったことは何ですか。

- A. 学習 B. 食生活 C. 人間関係 D. カルチャーションジョック E. その他

質問 19 クラブまたはサークルに参加していますか。

- A. はい クラブ・サークル名 \_\_\_\_\_ 参加理由 \_\_\_\_\_  
B. いいえ 不参加理由 \_\_\_\_\_

質問 20 アルバイトをしていますか？

- A. はい その理由 \_\_\_\_\_  
B. いいえ その理由 \_\_\_\_\_

質問 21 アルバイトがしたいですか。（複数回答可）

- A. はい A. お金のため B. 社会経験（けいけん）のため C. 日本語学習のため  
D. 友達を作るため

- B. いいえ

**人間関係**

質問22 どのようにして友達ができましたか。

- A. 授業 B. クラブ・サークル C. アルバイト  
D. 親友(しんゆう)の紹介(しょうかい) E. その他( )

質問23 友達は何人ぐらいできましたか。

- A. 2人以下 B. 3~4人 C. 5~6人 D. 7~8人 E. 8人以上

質問24 山口大学の友達の中で、どの国の人が一番多いですか。

- A. 母国(ぼこく) B. 日本 C. 中国(ちゆうごく) D. 韓国(かんこく)  
E. その他

質問25. 国際交流の行事(ぎょうじ)に参加(さんか)しましたか。

- A. 全然(ぜんぜん)参加(さんか)しない B. あまり参加(さんか)しない。 C. 時々参加(さんか)する  
D. よく参加(さんか)する

質問26 他国の人と交流(かうりゅう)する時に、一番(いちばん)困(こまる)ることはなんですか。

- A. 言語(げんご)の差 B. 生活(せいかつ)習慣(じゆんかん)の差(さ) C. 文化(ぶんか)の差 D. 困(こまる)ることはない  
E. その他

質問27 今(いま)の人間(にんげん)関係(かんけい)について満足(まんぞく)していますか。

- A. 不満 B. あまり満足(まんぞく)していない C. ぶつう D. 満足 E. とても満足

**旅行(りょこう)について**

質問28 これまでどのくらい旅行(りょこう)をしましたか。

- A. 3回以下 B. 4~6回 C. 7~9回 D. 10回以上

質問29 日本のどこに一番(いちばん)行きたいですか?

- A. 東京(とうきょう) B. 北海道(ほっかいどう) C. 大阪(おおさか)  
D. 京都(きょうと) その他

質問30 山口県(やまぐち)で一番(いちばん)行きたいところはどこですか。

- A. 岩国(いわくに) B. 萩(はぎ) C. 秋吉台(あきよしだい)  
D. 下関(しもつけぎ) E. その他( )

**日本の留学生生活(りゅうがくせいせいかつ)について**

質問31 国際交流(こくさいこうりゅうがく)会館(かいかん)について

- A. 不満 B. あまり満足(まんぞく)ではない C. どちらとも言(い)えない D. 満足  
E. とても満足

質問32 授業(じやうぎ)内容(りやうぎ)や先生(せんせい)の指導(しどう)について

- A. 不満 B. あまり満足(まんぞく)ではない C. どちらとも言(い)えない D. 満足  
E. とても満足

質問33 大学の事務(じむ)手続き(てつぎ)について

- A. 不満 B. あまり満足(まんぞく)ではない C. どちらとも言(い)えない D. 満足  
E. とても満足

質問34 留学生(りゅうがくせい)に対する待遇(たいぐう)

- A. 不満 B. あまり満足(まんぞく)ではない C. どちらとも言(い)えない D. 満足  
E. とても満足

質問35 物価(ぶつか)水準(すいじゆん)について

- A. 不満 B. あまり満足(まんぞく)ではない C. どちらとも言(い)えない D. 満足  
E. とても満足

質問36 最後に留学生(りゅうがくせい)生活(せいかつ)について自由に書いてください。



## 資料 2

## チューターマニユアル Q &amp; A (12の質問)

## Q1. 「チューター制度」とはどのような制度ですか。

山口大学に在学する外国人留学生に対し、指導教員の指導のもとに大学が選んだ「チューター」が、個別の課外指導を行い留学生の学習・研究成果の向上を図る制度です。

留学生は、言葉・大学制度・生活習慣の相違から、勉強・研究上多くの困難を抱えています。チューターは、留学生と日常的に接触し、留学生の抱える問題点を出来るだけ早く知り、留学生の指導教員や国際センターの教員等と相談しながら留学生を援助していただきます。大きな問題が起きないよう日常的に援助する点で、チューター制度は大きな意義があります。

## Q2. チューターになりたいのですが、何か資格が要りますか。

特別な資格は必要ではありません。留学生の教育指導については、それぞれの指導教員が責任を持っています。原則として、①留学生の専攻する分野であること②熟意や適性があることが重要です。

## Q3. 対象になる留学生はどんな学生ですか。

山口大学に在籍する学部及び大学院留学生が対象です。学部の留学生は最初の2年間、大学院の留学生は渡日後最初の1年間です。つまり、日本に慣れていない留学生です。日本語・日本文化研修留学生（日研究生）はチューターの対象になりません。

## Q4. 期間と時間数はどのくらいですか。

チューター実施期間は、基本的には半年か1年です。ただし、学部留学生については、2年目そのまま続けられる場合がありますので、指導教員に相談していただきます。実施時間は、1回2時間程度とし、年間80時間、半年40時間が標準です。

## Q5. チューターオリエンテーションはいつありますか。

4月と10月に開催されます。各学部の留学生係から連絡がありますから、必ず参加してください。チューターの心得や提出書類などについて説明されます。わからないことは何でも遠慮なく質問してください。

## Q6. 「実施計画書」と「実施報告書」はどのように書くのですか。

チューターは、担当する留学生在が決まったら、出来るだけ早く留学生と連絡を取り、スケジュール等についてきちんと話しあって、「実施計画書」を作成してください。留学生在が求めていることや援助して欲しいことを具体的に聞いてください。「実施計画書」は各学部の留學生担当係に提出してください。

「実施報告書」には実施時間数（開始時間と終了時間）を正確に記録し、実施内容を簡潔に記入してください。チューターと留学生の印またはサインが必要です。1ヶ月分をまとめ、指導教員の承認印をもらい、翌月初めには前月分の「実施報告書」を各学部の留學生担当係に提出してください。提出された報告書に基づき、謝金が支払われます。開始時間と終了時間を計り忘れないでください。チューター謝金は1時間1,000円程度です。

## Q7. チューターの仕事内容はどのようなものですか。

大きく分けて4つの仕事があります。

## ① 日本語支援

留學生が最も期待して支援です。日本語学習の速度にはかなり大きな個人差があります。学習者のレベルに合わせて支援してください。日本語による専門の講義やゼミでの発表・討論、レポートの作成等に悩んでいる留學生が少なくありません。

## ② 専門分野についての援助

担当留學生の専門の学習・研究がスムーズに進むように援助してください。留學生が大学院受検希望者には、過去の問題や、どのような学習方法が効果的なのかなどの助言をしてください。ただし、入試条件（日本留学試験の受験を課しているかどうか等）は変更されることがありますから、必ず指導教員から説明してもらおうようにしてください。

## ③ 事務的な事柄についての援助

大学で勉学を続けるためには、種々の事務的な手続きが必要でです。（奨学金の申請、授業料減免の申請、宿舍の申込、医療費補助申請など）

日本の大学のシステムがわからずに、掲示を見落したり、手続きに不備があると大変な不利益を被ります。留學生がこのような手続きを一つ一つこなしていけるように助けてください。学内の掲示板のお知らせについても留學生に周知してください。

④ 生活上の援助

- 山口に来たばかりの留学生には、次のような援助が必要です。
- \* 外国人登録と国民健康保険への加入手続き (市役所)
  - \* 銀行・郵便局・入国管理事務所での必要な手続き
  - \* アパートを探する場合の援助・・・山口大学生協がアパートの斡旋窓口になっています。留学生が希望する物件を探し、一緒に見に行くといいでしょう。
  - \* 国際交流会館・寮・アパートでの生活方法の説明
    - ・電気、ガス、水道、電話等の契約、支払い方法など
    - ・台所や風呂の使い方、ゴミの出し方
    - ・電話(市内、市外、国際)のかけ方
    - ・日常的な買物をする店や近くの飲食店など

08. 留学生に携帯電話の保証人やアパートの保証人を頼まれた時、断ってもいいでしょうか。

いいでしょうか。

チューターは学生ですから保証人は引き受けられないので、引き受けなくていいです。また、お金の貸し借りもやめてください。私費留学生の多くは、常に経済的な問題をかかえています。担当の留学生が、経済的な困難におちいった場合、指導教員や留学生担当係等に連絡して、解決の方法を相談してください。

09. 留学生にアルバイトを紹介して欲しいと頼まれた時、紹介してもいいでしょうか。

留学生がアルバイトをする場合は、「資格外活動許可」の手続きが必要です。各学部留学生担当係に申し出てなければなりません。

- ① 正規性(学部生・大学院生)と研究生は、週28時間以内
  - ② 聴講生(日研究生等)、日本語研修生、日韓予備教育生は、週14時間以内
- ただし、春季・夏季・冬季休暇期間中は②とともに、1日8時間以内です。
- また、風俗営業及び風俗関連事業所(パブ、スナック、パチンコ店など)でのアルバイトは禁止されています。問題を感じたら、指導教員や留学生担当係に相談してください。

010. チューターが頼められない時、どうしたらいいでしょうか。

個人的な理由もしくは留学生との人間関係がうまくいかないなど、チューターを続けることが困難な場合は辞退することが可能です。その場合は、指導教員または各学部留学生担当係や国際

センター教員に相談してください。

011. 留学生の個人的な相談内容についてどのように解決したらいいでしょうか。

留学生が抱える問題は多種多様であり、簡単には解決できないことが往々にしてあります。留学生の様子がおかしい時、体調が悪そうな時、事故に遭遇した時、アルバイト先でのトラブルなどに関して相談された場合は、速やかに指導教員、各学部留学生担当係、国際センター教員、保健管理センター、学生相談所、学生何でも相談窓口などに一緒に行き、相談してください。上記以外の所では、留学生の個人情報の秘密保持に充分配慮してください。

012. 宗教や文化の違いをどう捉えたらいいでしょうか。

「留学生が時間を守ってくれない」「食事に勝つてくれない」等、留学生との人間関係をうまく築けない場合もあるでしょう。そのような場合は遠慮せずに、お互い話し合うことが大切です。また、留学生が異性の場合は誤解を避けるため、留学生の居室で会うことは控えるようにしましょう。

留学生の思想や宗教を尊重する気持ちが大切です。例えば、イスラム教徒の場合は「肉類を食べてはいけません」「お酒を飲むてはいけません」等の制限があります。また、お祈りの時間も決まっていますので、時間を設定する場合は充分配慮してください。

日本人特有な表現形式(曖昧な言葉や表現)では真意が伝わりませんので、はっきり約束事を決め、わかりやすい言葉で説明してください。

対応方法がわからない場合は、一人で悩まないで適切な相談窓口を利用してください。

\*\*\*チューターの皆さんへ\*\*\*\*\*

留学生の良き友達になってください。何でも遠慮せずに話し合うことが大切です。留学生から相談された内容を一人で解決しようとすると大変ですから、常に指導教員、各学部の留学生担当係、国際センターの教員に遠慮なく相談してください。留学生の友達への輪が広がるようにしてください。担当留学生の国の文化・生活習慣などを習い、豊かな国際感覚を身に付け、チューター活動を通じて有意義な大学生生活を送ってください。

問い合わせ先

山口大学留学生センター 杉原道子  
TEL 083-933-5985  
E-mail michikos@yamaguchi-u.ac.jp



## 9. チューター制度をご利用ください。

- ①ポランティア精神が豊かで、留学生との相互学習意欲の高い学生をチューターに選んでください。研究室に適任者が見つからない場合は、広く学部ごとに公募していただくのも良いと思います。
- ②国際センターまたは学部内で行われるチューターオリエンテーションに参加させ、チューターの役割について認識させてください。
- ③チューター報告書を毎月チェックしていただき、チューターの役割を遂行しているかを確かめ、留学生とチューター双方の教育・指導を行ってください。継続が難しい場合は適宜チューターを交替させてください。

## 10. 留学生の宗教・思想・信条を尊重してください。

- ①留学生の宗教・思想・信条の自由を尊重し、それらを侵害する発言や行動はとらないようお願いいたします。例えば、イスラム教徒の学生の食事の制限やお祈りの時間等についてご理解ください。
- ②留学生は、日本と異なるさまざまな社会的、政治的、文化的背景をもっていますので、政治的な発言にもご留意ください。

問い合わせ先

山口大学留学生センター 杉原道子  
TEL 083-933-5985  
E-mail michikos@yamaguchi-u.ac.jp